

2021 年度第 4 回研究会（通算第 4 回目）

- 日時：2021 年 12 月 12 日（日）14:00–17:30
- 場所：オンライン会議室
- 共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」，東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」

本研究会では、社会言語学と音韻論を専門とする 2 名のメンバーが、まず、専門外のメンバーに対して社会言語学の「変異理論」についての概説を行った上で、それぞれの専門分野に関する研究発表を行った。

講師 1：南部智史（AA 研共同研究員，モナシュ大学）

「変異理論の説明」

本発表では、変異理論誕生の背景とその主眼、変異理論の変遷を 3 つの波に喩えた Penelope Eckert の視点を紹介し、また、変異理論における言語変化の捉え方について説明を行った。

まず、変異理論の研究対象に関して、変異理論以前の多くの研究では言語運用で観察される必然的な揺れを自由変異とみなしていたのに対して、変異理論では変異には規則に基づいた秩序（‘orderly heterogeneity’）が内在していると考え、それを言語知識固有の要素（‘inherent variability’）として言語変異を研究対象としている。また、他の言語理論では言語の同質性に基づいて議論を進めるのに対し、変異理論では idiolect 間の違いとして現れる言語変異に存在する規則性を認め、言語の秩序ある異質性に焦点を当てて研究を進める。

言語変化に関して変異理論では、（意識）上からの変化と（意識）下からの変化の 2 種類を想定し、主に進行中の言語変化について実時間調査と見かけの時間調査の 2 通りの手法を用いて言語変異の動向を観察することで言語変化の分析を行う。

変異理論の変遷に関しては、近年では当初のように研究対象の言語変異に付随する社会的意味を静的に捉えるのではなく、より動的な視点から人がどのように言語変異に意味を見出すのか、自己実現や解釈の中でどのように変異に対して意味付けを行うのか、それがどのように言語変化の駆動力となるのか、というテーマを研究の中心に据えるように変化してきた。

講師 2：南部智史 (AA 研共同研究員, モナシュ大学)

「コーパスを用いたダ抜き言葉の研究」

本発表では、「検討中(だ)と思われる内容」のような言語環境のコピュラの「だ」の使用および不使用を言語変異として扱い、変異理論の観点から現在進行中である言語変化の存在を明らかにした。まず、言語変化の動向を探るため、「だ」の使用に関する規範意識の調査を目的としてアンケート調査を行い、「だ」ナシより「だ」アリの方が評価が高い一方で「だ」ナシの使用は発話のカジュアルさとは直接リンクしていない可能性があるということ、述部が「と思われる」の場合は「だ」ナシの方がよりフォーマルだと評価されること等を示した。次に、BCCWJ、CSJ、CHJ の3つのコーパスを用いた言語使用の定量的分析の結果、「だ」ナシから「だ」アリへと変化していることを示し、また、統語論との接点として「だ」の使用と例外的格表示 (ECM) 構文の関係について歴史的視点を含めてコーパスデータを分析し、「だ」の不使用と対格「を」の使用が歴史的にはデフォルトであったところに「だ」が出現し、「だ」の使用の増加とともに主格「が」が現れることになったという説を提唱した。

講師 3：佐野真一郎 (AA 研共同研究員, 慶應義塾大学)

「音韻素性の重複とその回避制限の効果：有声性を例として」

日本語は、単語や複合語など特定の領域内で、有声の音韻素性 ([+voice]) を持つ分節音 (濁音) が複数現れることを回避する傾向にある。これは主に、類似または同一要素の隣接・近接を禁止する必異原理 (OCP voice, ライマンの法則) による効果とされてきた。本発表では、日本語における「連濁」(例, ほし + そら → ほしぞら) と「有声促音の無声化」(例, ドググ → ドクク) を取り上げ、必異原理による有声性回避方略の類型と、それに影響を与える要因について、コーパスと実験により行った調査結果を報告した。

まず、連濁・有声促音の無声化と有声性・異化との関わりについて明確にし、これまでの研究を概観する中で、問題の所在を確認した。次に、両現象についてコーパスを用いた数量的研究を紹介した。分析では、必異原理の効果自体に加え、濁音が複数現れる場合、形態素境界の有無、濁音同士の距離、濁音の数が連濁の抑制効果・促音無声化の促進効果に影響を与えることを確認した。続いて、

連濁に関する無意味語を使った実験の結果を紹介した。この実験では、有声性の一致回避と分節音の一致回避との相互作用について検証し、一致回避のために連濁が抑制・促進されることを確認した。最後に、コーパスと実験により、半濁音が濁音と類似の効果を持ち得ることを示した。

全体討論 (16:30-17:30)

「規則と変異・変化の範囲について～音韻現象を中心に～」というテーマで、自由討論と意見交換を行った。